論 文 の 内 容 の 要 旨

論文題目　　境界空間としてのピロティに関する研究

氏　　名　　武井　誠

序章　はじめに

人々のコミュニケーションのかたちは時代の流れに伴って大きく変化してきた。かつては、長屋の間の道の真ん中や隣人の家の縁側など、人と人とのコミュニケーションは様々な場所で自然に発生していた。しかし、近代に入りライフスタイルの均一化、画一化が進むと、曖昧な所有の状態で使われる開かれた公の場所は排除され、人と人との偶然の出会いの機会はほとんど奪われてしまうことになった。言ってみれば他者との間に明瞭な境界線が引かれた時代であった。しかし、成熟した現代社会においては、人と人とが地球上の限られた資源を共有し、より豊かで持続可能な生活を実現する方法が求められている。最近では建築・都市の分野でも「シェア」や「コモン」といった言葉で新しい公のあり方についての議論の熱が高まってきており、建築や都市の空間は外に開き、境界が消え、そこには曖昧な状態を許容する新しい関係性が発生しており、私と公、人工物と自然、内部と外部といった対立する２つの領域の中間にある厚みのある境界、すなわち境界空間が生まれてくる。人々のニーズが多様化していく中で、建物は施設の利用者だけでなく、外部の人々が気軽に立ち寄れるような、多様な活動を育む包容力のある、開かれた境界空間のあり方が求められているのだ。

一方で、役所等の公共施設がアプローチ空間を市民に開放したり、最近では住宅の１階を開け放して敷地と道路を繋ぐことで街の活動を引込んだり、そういった境界空間をつくる建築手法として、昔も今も頻繁に使われているのが「ピロティ」[1]である。ピロティはル・コルビュジエが新しい建築を実現する一つの建築手法として 1926 年に提唱してから、1980 年頃まで世界各地で頻繁に用いられ、モダンムーブメントの原動力となった。しかし、ポスト・モダニズム期に入ると、機能・用途と形態・空間が一対で考えられた近代のピロティはやがて人間不在の空間として批判され、姿を消してゆく。ところが、皮肉にも 1995 年 1 月 17 日に発生した阪神･淡路大震災ではピロティ形式の建築が多く被害を受け､逆に 2011

年 3 月 11 日に発生した東日本大震災ではピロティ構造が津波に効果的である[2]ことが立証されるなど、構造的な評価は一定ではないものの、ピロティが大きな注目を集めることとなる。そして、2016 年、国立西洋近代美術館本館が世界遺産に登録され、ピロティは重要な建築の技法の一つとして改めて広く世界に知られるようになった。しかし、ピロティが人々に開かれた集いの場を提供するのに有効な手段であるにも関わらず、現代ではピロティの評価が正当にされていない。それは同時に境界空間を構築する手法が体系化されていないということでもある。

筆者はこうしたピロティという建築技法に新たな可能性を感じ、ピロティを持つ建築を多く設計してきた。その中で 2014 年に完成した上州富岡駅[3]は、いわゆる近代のピロティの枠組みにあてはまるものではないが、大きな一枚屋根の下にピロティの性質を宿すことを目指した。その結果、駅と駅周辺に式典の為に人々が集い、と同時に、それとは無関係のお年寄りがベンチに座り会話に夢中になり、高校生が携帯を操作している、誰もが気軽に使うことのできる居場所をつくりだした。これは境界空間に起こる透明でオープンな現象にほかならない。

以上のような背景のもとで本研究では、外部空間や都市、自然環境といった建築の“ソト”の要素と建築とのつながりを媒介し、自由な行為、偶発的な出来事が育まれる「境界空間」としてピロティを捉え直し、ピロティの概念の新たな枠組みを理論的・実践的に提示していくことを目的とする。

第１章　境界空間の概念的枠組み

近代建築の手法であるピロティを現代の文脈で捉え直す際にそれが何を意味するのかを探求すべく、その議論の軸として、境界空間に関わる概念的枠組みを４つ挙げた。

①中間領域

すきまやスレショルド（閾）といった考え方で用いられる中間領域という概念と境界空間の概念との関係を明らかにし、本論で用いる境界空間の概念を整理する。

②他者を引き込む境界空間

境界空間を「私と公」「人工と自然」「ウチとソト」等という２つの相対する領域を分けながらも、様々な「他者」を受け入れるための空間として捉える観点を提示する。

③浮遊する境界空間

「無目的的であること」「自律的であること」という２つの軸から理解する「浮遊」という概念を通して、境界空間に求める空間的性質について考察を加える。

④都市のプラットフォーム

都市において少し高くなっているプラットフォームという場が舞台となり、人々の活動を誘発するような性格を境界空間に求めることの意味について論じる。

第２章　ピロティの歴史

ル・コルビュジエが建築の手法としてのピロティを提唱してから今日までの建築、そし

て都市計画へ及ぼした影響とその評価の変遷などについて記述するとともに、モダニズムのピロティの歴史を振り返りながらピロティが建築にもたらした社会的な意味にも触れる。

第３章　ピロティの空間特性

近代以降に作られてきたピロティ空間の基本的な特徴・性質の調査を通して、近代建築作品のピロティのデータベースを構築する。そのデータベースを対象に、ピロティ空間の構成要素やピロティ空間と周辺との関わり等についての分析を行う。更にそうした分析を通してモダニズムのピロティを俯瞰し、その中で僅かにしか見られない、あるいは多くの事例で共通し、新しいピロティへの展開可能性秘めたピロティの変数となる空間的特徴として以下に示す６点を抽出し、それぞれについて具体的な内容について論じる。

①プロポーションの逸脱による開放を象徴するファサード

ピロティ空間の天井高さを通常よりも高く設定することで、ピロティが開かれていることを外部に指し示すことができる。建築が軽やかな佇まいにみえると同時に、建築のボリュームは消え、より他者を引き込みやすい境界空間のみが建ち現れてくる。

②大地の形状を活かす内部空間の自然環境への浸透

ピロティ空間の地面は大地を荒らさないように、そっと建築と地面を繋ぐことにする。すなわち、地面との接点を最小限にすることで、最大限に周囲の環境を建築の内部に取り込み、建築と大地との密接な関係性を築く境界空間としてピロティが重要な意味を持つ。

③身体性を誘発する肌理による人々が集う空間

ピロティ空間の仕上げを微細なスケールに分解し、それを人間に快適なモデュールによって再構築することで、人が寄り添いたくなるような要素に変換され、目的がなくとも自然と人々が集まるような居心地の良い境界空間になる。

④ピロティで敷地境界をつくることによる私と公が共存する空間

ピロティ空間をパブリックな領域に隣接させることで、ピロティが敷地境界を暗示する。ピロティは前面道路というパブリックスペースの影響が大きくなり、自ずと公の領域が浸透してゆく。一方でピロティによって持ち上げられたプライベートな空間は、覗かれにくくなり、逆にプライバシーが高くなる。ピロティ空間を持つことで開きながら閉じる建築の建ち方が可能となる。

⑤ピロティに穴を開けることで内部と外部が近くなる境界

ピロティ空間の天井に穴を開ける。すると、今まで浮遊の状態だった境界空間に上昇の運動が加わり、手前奥を無くすピロティに上下を無くす性格が加わることになる。今までは、ピロティの上部にあった内部空間をピロティ空間から見ることは無かった。またその逆も然りであり、お互いの活動を見ることのなかった関係が逆転し、見る・見られるの関係を発生させ、建築の内部と外部の距離を縮める境界空間となる。

⑥連続する地面によるまちと建築がつながる多様な場

ピロティ空間の床仕上げが、ピロティ空間とその外周だけでなく、敷地境界線を超えて

街のパブリックにまで延長されることで、まちと建築が視覚的にも心理的にもつながり、ピロティ空間の範囲を超えて多様な振る舞いが可能となる。その広がりは敷地の所有や管理の境界線をも超えることになり、「床の仕上げ」を介して人々の繋がりが生まれる。

第４章　境界空間としてのピロティの展開

第４章では第３章で提示したピロティの創造手法を、実例を通して記述しつつ､境界空間としての新しい｢ピロティ」のあり方を実践的に検証した。住宅から都市計画まで、ミクロなレベルではピロティが豊かな空間体験をつくる境界空間として、マクロなレベルではピロティが周辺と建築を紡ぐ媒介となる境界空間として論じる。そして最後に、竣工後の上州富岡駅が人々にどのようにつかわれてきたのかに触れながら、境界空間の概念を通してピロティを捉えることが「開かれたピロティ」と呼ぶ今日的な建築手法の提示に繋がることを示していく。

まちに開き、広く外へ続くピロティ

結章　まとめ

本研究は、ル・コルビュジエが「新しい建築の５つの要点」で唱えたピロティに関して、現存する彼の作品の分析を行うとともに、日本のモダニズム建築にどのようにピロティが浸透していったかという、近代以降のピロティの歴史について記述する。

そして、近代以降に作られてきたピロティ空間の基本的な特徴・性質を把握し、新たなピロティ概念の提示のための基盤を整理するとともに、

ピロティの空間特性を捉えていく。延いては、設計活動を通して、目的を明確にもつ領域同士の中間領域的存在であり、自由な行為、偶発的な出来事が育まれる豊かな体験を誘発する境界空間をつくる現代的なピロティの創造手法を記述しつつ、境界空間としてのピロティの概念の新たな枠組みを提示するものである。

ル・コルビュジエは、ピロティによって新しい建築をつくった。言い換えれば、モダニズムの建築はピロティなしでは新しいとは言えない。現代においても新しく豊かな建築を作るには、ピロティが密接に関係している。それは開かれていることなのだ。

---

[1] 「新しい建築の５つの要点」によって①ピロティ②屋上庭園③自由な平面④水平連続窓⑤自由な立面が提唱された。W.Boesinger,O.Stonorov(1964).LE CORBUSIER et PIERRE JEANNERET OEUVRE COMPLETE 1910-1929. Zurich: Les EDITIONS D'ARCHITECTURE.

[2] 田中礼治，澁谷陽 ： 津波とピロティ構造, 日本地震工学会誌, no. 27, pp36-41，2016

[3] 上州富岡駅は駅舎の老朽化に伴う建て替えの必要性と、世界遺産登録を目指す富岡製糸場の最寄り駅として駅舎の建替が行われる運びとなった。2011 年に、東日本大震災後、最初の公共事業の一般公募型コンペ「上州富岡駅設計提案競技」（応募総数 359 案）にて（株）TNA（武井誠＋鍋島千恵）が最優秀賞を受賞し、その案に基づき設計と建設を進めてきたものであり、2014 年３月に３代目の駅舎として生まれ変わった。（出典：公益財団法人日本デザイン振興会『グッドデザイン賞ホームページ』より http://www.g-mark.org/award/describe/41666